



感染症とたたかう

第6号

2016年
5月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

口の中が痛いヘルパンギーナ 飲食がづらいので、脱水に注意



エンテロウイルスによる感染症 突然の高熱と口内炎などが特徴

ヘルパンギーナは、春から夏にかけて乳幼児に発症するウイルスによる感染症で、いわゆる「夏かぜ」と呼ばれる病気です。

毎年5月ごろから患者さんが増え始め、6月下旬から8月にかけて流行します。ところが、8月下旬から患者さんが減り始めると、10月にはほとんど見られなくなります。これが、夏かぜと呼ばれるゆえんです。

地域的にみると、例年、西から流行が始まり、

東へと移っていきます。患者さんの年齢は5歳以下が全体の90%以上を占めており、1歳代が最も多く、年齢とともに少なくなります。

ヘルパンギーナは、エンテロウイルスというウイルスの一種であるコクサッキーウイルスA群によって発症します。このウイルスが、口や鼻などから体のなかに入り、2～4日の潜伏期を経て突然発熱し、38℃以上の高い熱が出ます。時には39～40℃近い高熱になることもあります。

熱は2～4日続きますが、その間に、のどや口蓋垂（のどちんこ）に炎症が起きて痛みが出ます。また、口の中に口内炎ができたり、直径が1～2ミリくらいの小さな水疱ができます。この水疱が破



れてただれたりします。同じように口の中に小さな水疱ができる感染症に「手足口病」がありますが、手足口病とは異なり、ヘルパンギーナの場合は、手や足には水疱が現れません。

口のなかの痛みへの対処が必要 好きな飲みもので水分を十分に

口のなかの痛みは4~6日でおさまりますが、この間、子どもは痛みや不快感のために不機嫌になります。また、喉が痛くて唾を飲み込めず、よだれを垂らすこともあります。結果として、乳児の場合は哺乳を嫌がり、それによって脱水症状を起こすこともあります。ただ、症状が重くなることはあまりありません。

多くのウイルス感染症と同じく、ヘルパンギーナに特別な治療法はありません。症状は、数日で自然に治まりますが、発熱や頭痛などへの対症療法が行われます。食欲不振が続くような場合は、脱水の治療が必要になるときもあるので注意が必要です。

発熱時には、水分を十分にとることが大切です。少しずつでいいので、子どもが好きな飲みものやイオン飲料などを飲ませましょう。刺激が少なく固くないもの、たとえばヨーグルトやアイスクリームなどもよいでしょう。

子供が好きといっても、ヘルパンギーナにか

かったときは、ジュースには気をつけましょう。ジュースのなかには酸味が強いものもあり、口のなかの痛みが増すことがあるからです。

ヘルパンギーナの多くは、数日で治ることがほとんどです。インフルエンザや風疹と異なり、学校保健安全法による明確な登校停止基準はありません。しかし、症状があるときは、ほかの人との接触を避け、友だちにうつさないように心がけることも必要です。

家庭内感染に注意を 大人がかかると症状が重くなることも

用心したいのは、家庭内で大人に感染することです。

一般に、大人は子どもよりも免疫力も体力も強くヘルパンギーナにはかかりにくいのですが、体調不良で免疫力が低下しているときには、親や祖父母などに二次感染することもあります。本人が元気になってもウイルスは長期にわたって便から排泄されることがあるので、おむつの交換の際にはマスクをするなど、注意した方がよいでしょう。

大人がヘルパンギーナに感染すると、39℃を超える高熱など、やや重い症状が続くことがあります。強い倦怠感や関節の痛みなども伴います。ヘルパンギーナにかかった場合は、数日間は仕事を控えるなど、周囲への感染拡大を防ぐようにします。

もし、子どもが幼稚園や学校などでウイルスに感染してヘルパンギーナにかかってしまったら、大人も体調を整え、手洗いやうがいをすることが大切です。

次号(2016年6月号)では
「手足口病」を取り上げます。